

背幅の話をしよう。

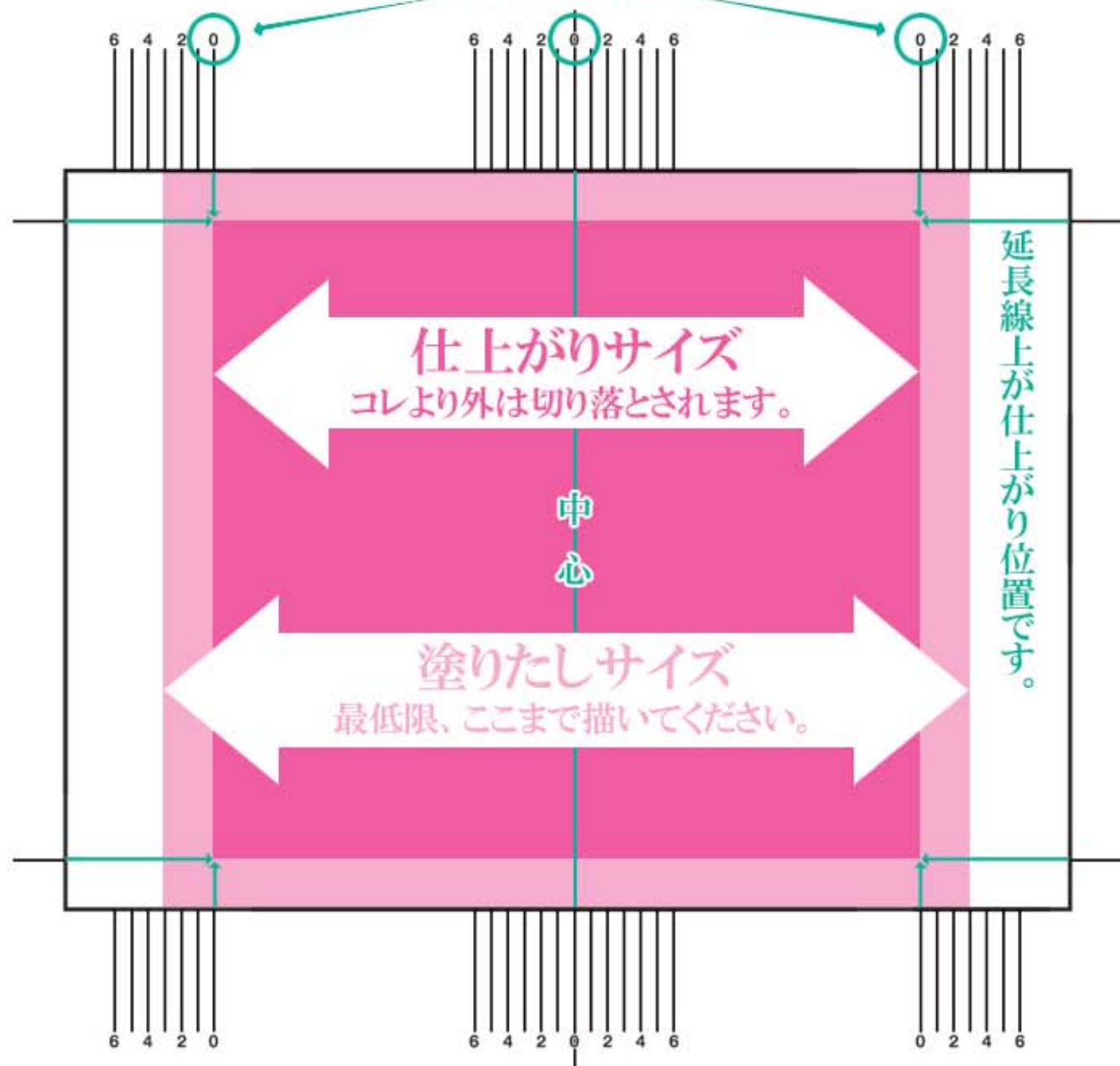
中綴じ(紙を折って中心をホチキス留めする製本)には不要の話だ。

無線綴じ——つまり、糊で背を留める製本は背表紙ができる。

これを忘れて表紙を作ると、塗りたいが足りなかったり
そもそも仕上がりにも足りなくなったりする。

中綴じの場合、もしくは背幅が1mm以下の場合は下図参照してほしい。

基準は0です



たとえば、100ページ、背幅3mmの本(本文用紙によって背幅は多少前後するよ!)を作る時。

テンプレートの四隅と真ん中の上下にあるメモリを見てくれ。

背幅3mmだから、2と4の間、なんてのは早計だ。6mmの背幅ができてしまう。

中心にある0を忘れないでほしい。データは中心から必要なサイズを使う。

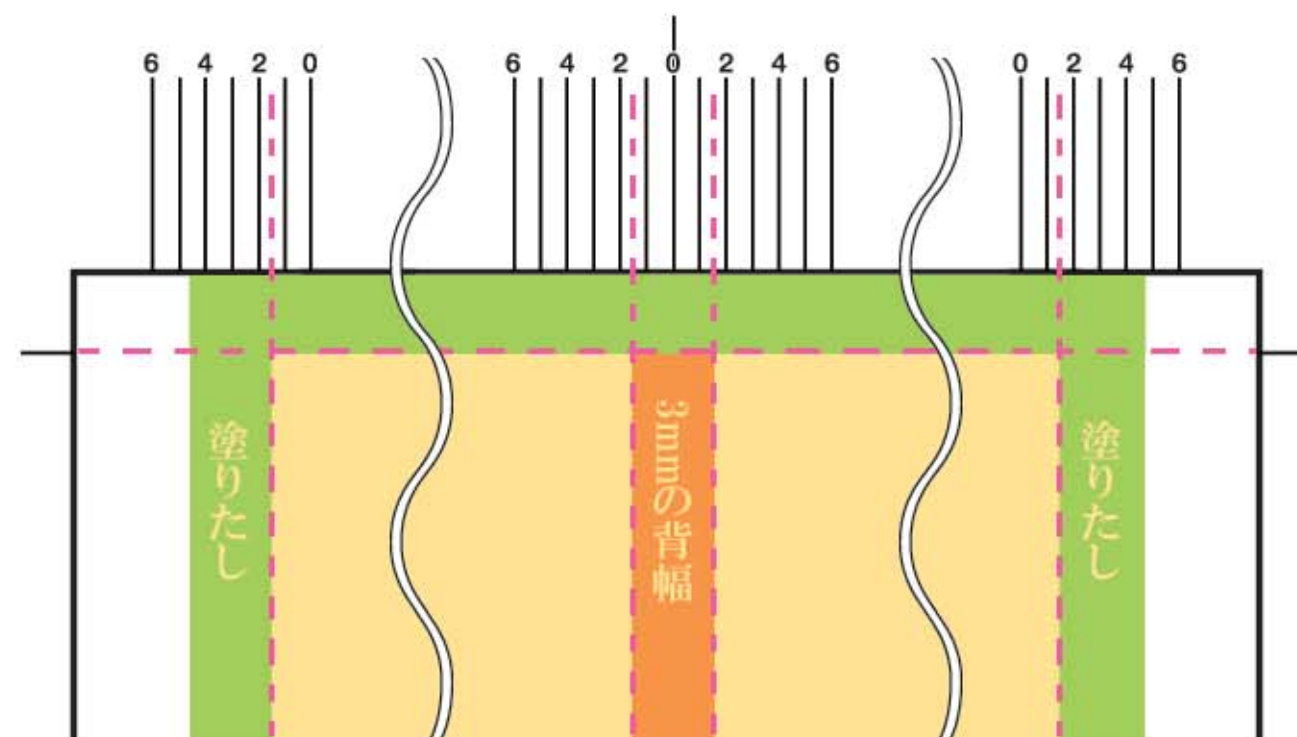
右へ1.5mm、左へ1.5mm、計3mmが背幅になる。

中心に背幅がある分、

左右の小口(本を開く方)にも、それぞれ1.5mmずつ必要になる。

背幅が変わっても、本の縦横の大きさは変わらないからだ。

背幅分左右に広がった分、塗りたいは更に外側になる。



こんな感じで、背幅によって必要な横幅は変化する。

背幅の計算が出来なければ聞いてほしい。

不安なら、事前にデータを送って問い合わせなくても構わない。

×切当日であろうと、不備データは修正して再入稿が必要になる。

修正に時間がかかって納品が間に合わなくても、こちらでは責任が取れない。

データがなければ印刷も製本もできないのだから。

入稿するのは不備のない、すぐに作業を進められるデータで頼む。

それを、人は完全データと呼ぶのだ。